
魔法少女リリカルなのは ~ 朱の物語 ~

風邪気味さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～朱の物語～

【Nコード】

N7367I

【作者名】

風邪気味さん

【あらすじ】

明日菜達『白き翼』が卒業してから、10年。ネギ・スプリングフィールドが、ミッドチルダであったのは？

- ・初投稿です。
- ・更新は不定期です。

PROLOGUE 1 (前書き)

段落の最初の一文を空けるにはどうしたらいいのですか？

PROLOGUE 1

魔法世界のとある森林地帯。本来なら夜にそこを照らす明かりは月明かりだけの筈だった。

しかし、その森林地帯を明るく照らしているのは月明かりだけではなかった。

地表に近いところから、あるいは上空から、赤い炎の渦や電撃を纏わせた竜巻、さらには、電撃の球体、光の球体が無数打ち出されていた。かなり、遠くから見れば、幻想的に見える光景だっただろう。だが、近づいて見ると壮絶な闘いを見ることができただろう。

闘っているのは二人の男だった。上空に浮いている男は、朱い髪 of 優男といった様子で、あちこち破れていたり、血が滲んいたりしている黒いスーツに肌色のローブを着て、身の丈程の杖を右手に持っている。何故か肩に白いオコジョを乗せている。地面に立っている男の方は裸に赤いコートを纏っただけだったが、左目のある場所にはナイフが刺さっていた。

二人の周りでは木々は薙ぎ倒され、下草すら吹き飛んでいて、地面の色を剥き出しにしていた。

そんな強烈な破壊の跡で二人は対峙していた。

地面に立っている男が口を開いた。

「さすがは偉大なる魔法使い（マギ・ステルマギ）といったところですかね？俺もなかなか強いと自負しちゃいるがテメエにや勝てる気がしませんよ。ン！？言葉遣い間違えました。」

そう言いつつも男は手を軽く振って足元に複雑な形の魔法陣を発生させる。

「だから、トンスラさせてもらいますよ。偉大なる魔法使い（マギ・ステルマギ）、いや、朱い悪魔のクソ野郎。ン！？また言葉遣い間違えちゃいました。」

そこで、ようやく上空にいる男が口を開いた。

「逃げられると思っていいのか？一言『発動』と唱えるだけでこの森林地帯全域をカバーする戦術広域魔法陣が発動する。精密な作業を必要とする転移魔法の発動中に行えば正確な転移などできずに全く知らない場所に転移して自滅することになる。」

「おいイイイ、兄貴そりゃねえつてオレっち達まで巻き込まれちまうつて！」突然、肩に乗ったオコジヨがしゃべりですが、男は驚くことなくそれに答える。「心配しなくてもカモ君は僕がちゃんと守るよ。」

そして、もう一度下にいる男に問い掛ける。

「逃げられると思っているのか？」

下にいた男は行動で答えた。転移魔法を発動させて体を徐々に魔法陣の中に沈ませていく。

「チツ『発動』」

「おいイイイ！兄貴イイイ！！」

上空の男も行動で答えて、躊躇なく戦術広域魔法陣を発動させる。オコジヨが、何かいつていたが当然無視する。

しかし、

「何い！？」

上空にいる男の真下で転移魔法用の魔法陣が起動していた。

「誰が俺一人で逃げるなんつた？テメエも道連れにしてあげます。ン！？また言葉遣い間違えちゃいましたね。」

「貴様アア！」

次の瞬間には誰もいなくなり、森林地帯にはいつも通りの静寂が戻った。

PROLOGUE 1 (後書き)

まだPROLOGUE

PROLOGUE 2 (前書き)

待っていてくれる人がいるかどうかわかりませんが投稿します。でも、前回の続きではありません。この後の投稿も不定期です。頭の中で話は固まっているのですが、筆不精な上文才がないので・・・。待っていてくれる人には申し訳ありませんが、気長に待っていて下さい。

PROLOGUE 2

新歴71年。ミッドチルダ臨海空港の火災の後、3人の少女達が新たな目標に進もうとしている頃、第三―管理外無人世界に存在した一つの施設に二人の人影が近づいていた。

その少年は“ここ”から出たことがなかった。年齢は6歳くらい。本来なら元気に遊びまわっていても誰にも何も言われないような年頃であるが、たまたま強い魔力を持っていたことに加え容姿、特に髪の色などが違っていたために実験体として生まれてからずっと“ここ”にいた。彼はいつも灰色の部屋で一人だった。

二つの人影は中で警備をしている管理局の武装局員を　主に朱いコートを着て左目に眼帯を付けた男の方が　殴り飛ばし、蹴り飛ばし、魔砲を食らわし、物音を立てながら突き進んでいた。

「まったく……。当初の予定ではもつとゆっくり慎重に侵入するつもりだったというのに……。」

そうフードを顔の表情が見えないほど深く被った黒いローブの男がボヤクと、

「まあ、結局やることは変わらないわけですし、結果オーライってことをでいいじゃねーか。ン！？言葉遣い間違えてしまいました。」
眼帯の男が軽口で返す。そのまま二人は突き進む。すると前方で20人以上の魔導師がデバイスを構え合わせて100発近い数の魔力スフィアを展開していた。

「止まれ！いますぐ武装を解除して投降しろ。」
並の侵入者ならおとなしく投降したかもしれなかったが、

「それがどうした？アアン？ン！？言葉遣い悪かったですね。」

警備隊達にとつてとても不幸なことに

「邪魔だ！失せろ！『アスカロン』！」

《アクセル・シューター》「ッ、ッ、グワッ、ッ、ッ」

・・・彼らは並の侵入者ではなかったのだ。

少年はいつまでたつても白衣を着た人達が入って来ないのが不思議だった。今まで彼らが時間通り 部屋に時計はなかったが少年には毎日同じ時間に来るのが分かっていて 現れなかったことなどなかったからだ。不思議に思っていると何かを吹き飛ばすような音が徐々に近づいて来るのが分かった。

そして、

「ここで最後ダァーッ。」

朱いコートに左目に眼帯を着けた男と、

「・・・もう、ツッコマんど。」

黒いローブを羽織りフード顔をすっぽりと覆った男が入って来た。

「ダレ？」

これが少年にとって運命の出会いとなった。

PROLOGUE 2 (後書き)

走り出した列車は止まることなく、近づく者は機械の壁に阻まれる。崩れる少年のために少女は悲痛な叫びをあげ、竜の魂とともに、偉大なる魔法使いを呼び寄せる。

そして、彼らは出会った。

次回

『朱い偉大なる魔法使い(マギ・ステルマギ)』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7367i/>

魔法少女リリカルなのは ~朱の物語~

2011年10月6日05時34分発行